

## 年頭所感

### 年頭所感

宮城県医師会会長 佐藤和宏



明けましておめでとうございます。昨年は、史上最も厳しい経営状況だった医療界でしたが、高市新総理のもと、令和7年度の補正予算による補助金額が大幅にアップされるなど、少しは好転の兆しが見えてきました。実質6月からの診療報酬改定にも大いに期待したいですが、現在の所は今一つの感じもしています。

中医協の委員だった診療側の委員の1人は、任期を終えた退任の弁で「今後医療界の荒廃があれば、責任はあなたたちにもある」と言ったそうです。支払い側の方々を指していると思われ、その通りだと思います。しかし一方で、診療側と支払い側が同じ日本人でありながら、いがみ合っても良い結果は得られないと感じてもいます。例えば、令和7年3月に健康保険組合連合会から出された「高額医薬品の適正使用の推進のための調査研究」などは、私たち医療者側も注目すべきです。全国のステージ4のがん患者さん1万5千人の使用する抗がん剤は、10～15年前と比較して、10～50倍高額となっていると報告されています。年齢、ADL、認知症の程度、本人、家族の希望などによって、適正使用を選択するのは医師です。ただし、実際の現場では難しい事もよく知っています。

私は日医の医業経営検討委員会委員長を3期務めておりますが、事務方で調査してもらった結果、すべての医薬品の使用額トップ30では、抗がん剤関係は36%を占めていました。医薬品関係は、こうした高額な抗がん剤の問題、大手薬局チェーンの問題、OTC類似薬の保険外しの問題、処方箋料のさらなる減額の問題など、問題は山積しています。

このうち、処方箋料の処方料への減額とOTC類似薬の保険外し等を行われたら、医療機関、殊に診療所の経営はまず持ちません。正月早々、暗い話で恐縮です。仮にそうなれば、予防接種、学校保健、母子保健などにも大きな負の影響があり、そうなったら行政側も本当に困ると思います。病院が倒産し、診療所も無くなつてみて、初めて事の重大さに気付いても、もはや手遅れです。全国に張り巡らされた診療所の貴重なネットワークを守り、病院の存続を可能にするためにはどうしたらよいのでしょうか。

まずは、補正予算による補助金の迅速な支給をお願いしたいところですが、診療報酬改定も大幅にアップすることを期待します。しかし、同時に、負担増となる国民の理解を得る事も重要です。医療を1番知る私たち医師が、社会的共通資本である医療を、敵対勢力の攻撃から守り、医療をしっかりと国民に届けることは重要であり、そのためには国民やマスコミなども味方につけて行くことが求められています。

新年早々、暗く少し恐ろしい話でしたが、船のかじ取りを間違うと座礁してしまう難所に差し掛かっています。私たちの力を結集して、この難局を乗り越えていきたいと思います。

今年も、宮城県医師会、宮城県医師会健康センター、宮城県医師会協同組合をよろしくお願ひ申し上げます。